

田園都市の未来図

角田市長選を前に

①

下降線たどる人口

ライターを囲んで誇らしげな学生たち。商店街の路地で遊ぶ子どもからは、今にも歓声が聞こえてきた。六月、角田市内の商店内のギャラリーで開かれた「昭和の写真展」。伊具盆地の拠点として栄えた角田の風景が、セピア色の記憶となつて焼き付けられていた。

長した都市に今、その頃の活気は感じられない。一九八九年の三万五千

アクセス ス道の活用カギ

七百をピークに人口は下降線を描き、二〇二〇年には三万を切るという試算がある。商圏人口は縮小を続け、中心商店街の経営者からは「新たな投資はもう無理。私の代で店も終わる」とのため息が漏れる。

周囲を山に囲まれ、国道4、6号などの主要道路からは離れた角田市。一九七〇年代に大規模工場の誘致に成功し、急成

低下する求心力

比較すると、積極的に住む理由が見つからない」と率直に分析する。交通環境を整備し、通勤圏を広げるだけでは、定住人口の増加は難しくなった。福祉、環境、文化。魅力を打ち出し、人々を強く引き付ける求心力がなければ、都市間の競争に生き残っていけ

可能とし、地域農業の維持に役買ってきた。だが、誘致企業に頼った振興策は既に曲がり角。かつて市内で完結していた経済と生活の循環は既に、ほころびが目立ち始めている。

質な環境は魅力だが、もはや新規に事業を展開する理由にはならないだろう」と冷やかに語る。山元町の常盤道インターへのアクセス道の整備が進む。「地域発展の特効薬」と期待は高い。角田市枝野地区

は、交流人口の限られた盆地を直撃する。仙台、田園都市として知られる角田市は、〇二年調査で県下九位の農業粗生産額を誇る一方、製造品出荷額が八位と工業都市の顔も併せ持つ。誘致企業も併せ持つ。誘致企業は、全市の就業者の二割を超え、二千三百人。職住一体の地域社会が兼業農家を

に整備した中島工業団地。工業用地六万四千平方メートルのうち、分譲開始から八年たった今も三分の一ほどが売れ残る。市は県主催の説明会などで懸命のセールスを展開するが、反応は鈍い。

誘致企業のある社員は「生産部門を海外に移す時代。広大な面積と良

市内では、山元町にてさる常盤道インターにトンネルで直結する県道工事が進む。「東北道、常盤道の双方につながる中間地として地域を売り込みたい」と市幹部は意気がかかっている。



平成15年度 県道改定01102-001号
枝野道路改良工事
区間 一斗田山下線 角田市枝野地内
期間 H.15年10月21日~H.16年12月20日
施工 株保志工務店
請負額 68,250千円
現場責任者 菅野 弘志
TEL.0224-63-3556
監督 宮城県大河原土木事務所
TEL.0224-53-3111
宮城県